

介護トータルシステム



介護トータルシステム『寿』

導入事例集



株式会社 南日本情報処理センター

目次

第1章 居宅サービス

- 『寿』を活用したケアマネジャーの現場インタビュー

第2章 訪問・通所系サービス

- 在宅生活を支えるICT連携-法人システム統合の挑戦と実現
- 訪問看護記録はその場でパッと入力・隙間時間をフル活用
- ケアプラスビューリンクを活用した運用事例
- ケアプラスfor『寿』を活用した記録運用事例

第3章 施設系サービス

- R4(全老健ケアマネジメント方式)を活用した運用事例
- 『寿』を活用した記録管理の運用事例
- 介護記録業務のICT活用で、業務効率化
- 7割の職員が「紙カルテより使いやすい！」と実感
- 『寿』で介護記録をICT化・LIFE運用もスムーズに

介護トータルシステム



ホームページにも
導入事例を掲載しています！



介護 寿





運用事例

『寿』を活用した ケアマネジャーの 現場インタビュー



介護支援センター ひまわり園
管理者 徳石 良江 様



社会福祉法人 中江報徳園 介護支援センター ひまわり園 様

■所在地

鹿児島県鹿児島市犬迫町5407-2

■関連施設

特別養護老人ホームひまわり園、グループホームサンひまわり、訪問入浴ひまわり園、
デイサービスセンターひまわり園、ヘルパーステーションひまわり園、
活き生きセンターひまわり園 (<http://www.himawarien.jp/>)

社会福祉法人中江報徳園 介護支援センターひまわり園様(鹿児島県鹿児島市)は、地域における介護についての幅広い相談窓口として、介護支援専門員8名でケアマネジメントサービスの提供を行っていらっしゃいます。

今回は、現場のケアマネジャーの視点から『寿』について、副施設長の北野様、管理者（主任介護支援専門員）の徳石様、介護支援専門員の内田様に、率直なご意見を語っていただきました。

—ひまわり園様について教えてください。

北野様 当法人は、昭和43年に鹿児島県において、社会福祉法人としては第一号となる特別養護老人ホームを開設しました。

犬迫・伊敷地域は、高齢化が進んでいる地域です。高齢者の方は、要介護・要支援状態かどうかにかかわらず様々な「ニーズ」を抱えながら生活していらっしゃいます。当法人は、社会福祉法人として、介護保険サービスの枠にとらわれない活動にも積極的に取り組んでおります。「活き生きセンターひまわり園」で行っている、高齢者の方が健康でいきいきとした在宅生活が送れるように自立支援をサポートする活動も、多様な「ニーズ」にお応えしたいと続けている活動の一つです。

そういった活動を通して、地域を支える中核を担っていくことが、本当の地域貢献だと考えております。

徳石様 歴史が古い法人だからこそ、地域の方には「何かあったらひまわり園に相談しよう」、「助けてもらおう」と頼りにされているように感じます。ひまわり園の職員の一人として、地域の方が持っている“ひまわり園のイメージ”を崩したくないと日々努めています。

—介護支援センターひまわり園様が目指しているケアについて教えてください。

北野様 介護支援センターひまわり園には、居宅介護支援事業所(以下：居宅)として、一番地域に近いところで親身になって利用者様の「ニーズ」を拾い上げる役割を担ってもらっています。

徳石様 事業所を運営していくなかでは、「利用者様を待たせない、迅速に対応する」というのを方針の一つとしています。

私共は利用者様やご家族、地域の方から、日々、困ったことや何気ない相談のご連絡をいただきます。その際に、担当のケアマネジャーがすぐに対応できない状況だと、利用者様がお困りになりますよね。

ケアマネジャーの仕事は、単独で動くことが多い仕事です。そういった中でもご相談事に迅速に対応するには、担当ケアマネジャーのみが利用者様の情報を把握するのではなく、誰でも対応できるように、事業所全体で「情報を共有する」ことが必要なことだと考えています。

—「情報を共有する」ために、どのようなことに気を付けていらっしゃいますか。

徳石様 『寿』の利用者台帳の機能を活用しています。利用者台帳は利用者様一人につき、一つの台帳を事業所内で共有します。基本的な情報から家族構成や主治医の情報などが網羅的に入力ができますので、アセスメントで管理しきれない情報も、利用者台帳に入力し管理ができています。

—利用者台帳で気に入っている点はございますか。

内田様 何を入力しなければならないのかというのがぱっと見てわかりますし、入力順も考えられていたり、選択形式で直感的に入力ができるというのはいいですね。

徳石様 印刷する際に、使いやすいように加工できる点も気に入っています。使っていない項目は削除して、必要な情報のみを伝える資料を作成できますので、他事業所との情報交換などにも使っています。

「情報を共有する」ことで二度手間・三度手間を無くし、迅速な対応を目指すということは、「業務の効率化」にもつながっているように感じます。

—「業務の効率化」について、『寿』をどのように活用されていますか。

徳石様 インテークからアセスメント・ケアプラン・給付管理まで一元管理できる点は、業務の簡素化につながっていると感じています。

また、FAX連携の機能も気に入っています。法人外のサービス事業所分は、ほとんどこの機能を使用して提供票をFAX送信しています。

業務終わりにボタンをポンッと押して帰れば、次の日の朝には提供票が送信されていますので、かなりの時間短縮になっています。なにより便利ですね。

内田様 提供票も人数分を毎月、紙に印刷しないといけなくなると、とんでもない量の紙を使うことになります。FAX連携の機能は、コスト削減にもつながっています。

誤送信がないことも、利点の一つですね。人力でFAX送信を行うとなると、どうしても誤送信がおきてしまいます。FAX連携機能を使用することで誤送信を防いでいるのは、利用者様の個人情報保護の観点からも助かっています。



—今後の展望や『寿』へ期待することをお聞かせください。

徳石様 地域の方からは何気ない相談でもお電話をいただきます。サービスのご利用が無くても、地域の方が今何に困っているのかを見極めるために訪問したことが、サービスのご利用につながるケースもあります。

また、包括支援センターや協力機関からの紹介だけではなく、ご家族様のお知り合いや地域のつながりなどから利用者様をご紹介いただくことがあります。

私たちのご支援は間違いではないと自信になりますし、気持ちが高まる瞬間です。

北野様 自分達から積極的に出向いていくことに加えて、高齢者の駆け込み寺ではないですけど、気軽に相談に来ていただいて、「ニーズ」に寄り添える場所であらうと色々な角度から検討を始めているところです。

内田様 利用者様からの信頼というのは、ちょっとした約束を違えただけで崩れてしまいます。今後も利用者様との信頼関係を築き、維持していくことに努めたいです。

そういった意味では、『寿』には、モバイル端末を使ったスケジュール管理や業務支援アプリなども含めて、ケアマネジャーの業務をトータルでサポートするような役割も期待しています。

●本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

●記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。



株式会社 南日本情報処理センター

製品情報はこちら (<http://www.kk-mic.jp/kotobuki/>)

本 社
東京支社
宮崎支社
福岡オフィス

鹿児島市東開町4-104
東京都品川区南大井6-16-4戸浪大森ビル8F
宮崎市広島2丁目5番16号興亜宮崎ビル5F
福岡市博多区博多駅東2-5-19サンライフ第3ビル6F

TEL 099-269-9720 FAX 099-269-9719
TEL 03-6436-8686 FAX 03-6388-9450
TEL 0985-29-9900 FAX 0985-29-9127
TEL 092-260-7793



導入事例スペシャル

在宅生活を支えるICT連携

—法人システム統合の挑戦と実現—



姫路医療生活協同組合 様

お客様情報

所在地 : 兵庫県 姫路市 双葉町10
URL : <https://himeji-mcoop.or.jp/>
基本理念 : 「その人らしく、気持ちよく生きる」

すべての人が住み慣れた地域で「その人らしく、気持ちよく生きる」ことができるよう、私たちの事業と活動を通じてサポートします

事業所数 : 病院1 / 診療所1 / 歯科1 / 看護小規模多機能型居宅介護2 / 小規模多機能型居宅介護7 / 訪問介護4 / 訪問看護8 / 居宅介護支援事業所8 / 通所介護4 / 定期巡回・随時対応型訪問介護看護4 / 福祉用具レンタル2 / 通所リハビリテーション2 / 短期入所生活介護1 / 認知症対応型共同生活介護1 / 相談支援事業所1 / 地域包括支援センター1 (姫路市より委託) / 訪問入浴1

職員数 : 900名、年間収益 : 50億円

導入製品 : 介護トータルシステム『寿』、ケアプラス、イーキューブさらり

姫路市とその周辺地域で医療・介護事業を展開する姫路医療生活協同組合様は、在宅介護サービスを中心に46の介護事業所を運営されています。

「業務の効率化」と「サービスの質の向上」を目的に、法人内のシステム統合とICT化へ取り組まれています。モバイル利用による訪問系サービスの直行直帰、法人内のデータ連携による報告業務・紙使用量の削減を実現しました。

今回は、法人運営・データ分析・システム統合・モバイル運用という切り口で、介護トータルシステム『寿』・ケアプラスfor『寿』の活用方法をご紹介します。

キーワード

介護記録業務のICT化

経営データ分析

スマホ・タブレット入力

システム統合

クラウドサービス

残業時間削減

紙面構成

1. 「法人全体について」 黒岩様
2. 「リハビリ部門について」 田中様
3. 「システム部門について」 柏木様
4. 「訪問介護・定期巡回について」 稲田様/渡辺様

1. 法人全体について

—姫路医療生協様について教えてください。

姫路医療生協は、「安全・安心の介護と医療で在宅生活を支える」ためのサービスを展開しています。住民参加型の「まちづくり」を後押しすることが、地域包括ケアの推進につながると考え、各日常圏域での生活支援・介護予防に注力しています。目に見える存在として、「姫路医療生協があって安心ね。」と思ってもらえる法人を目指しています。

—ICT導入のきっかけを、お聞かせください。

姫路市内では、2040年までは介護需要が増えていくと捉えています。拡大する需要の中で挑戦しないことは、後退を意味します。環境の変化・市場の変化に、自ら変わることをしないと、対応できなくなっていくんですね。

また、優秀な専門職は、挑戦のある職場を探しています。振り返ると、これまで、定期巡回や看護小規模多機能など、地域で初めての事業も展開してきました。

法人にとっての新しい挑戦として、「ICT化を進める」ことを掲げました。

—ICT導入の目的は、どのようなものでしたか。

「業務の効率化」と「サービスの質の向上」です。付随して、コンプライアンスの順守・情報の共有・働き方改革を実現したいと考えています。

特にコンプライアンスの順守については、ICTを用いることで、紙カルテとは違って、どこに何を記載するか標準化されます。我流を認めず標準化を進めれば、コンプライアンスを高め、質の高いサービスにつながります。

—『寿』に決めた理由は、何でしたか。

もともとは、訪問看護の効率を上げたいというのが直接のきっかけでした。事業所に行き、紙カルテを持って、利用者宅へ訪問するというのは、非常に効率が悪いです。直行直帰を増やすために、タブレット化をしていきたいな、と考えていました。

ICTには、
若い人が持つ
介護のイメージを
変える魅力があると
期待している

専務理事

黒岩 勝博 様



また、これまで導入しているシステムとの互換性も、考慮しなければなりません。『寿』には、そのどちらも、柔軟に対応してもらったというのが、決め手として大きかったですね。

—ICT導入で、どのような成果がありましたか。

色々なことがデータ化され、数値として見えるようになりました。経営会議では、具体的なデータに基づく内容が増えました。見える化し、数値を分析することから、新しいアイデアが生まれていると思います。

職員間の情報共有のために、TV会議システム・ビジネスチャットも導入しました。TV会議システムを使い始めて、事務所間の移動時間がゼロになっただけでなく、会議の事前準備が入念になり、集中して会議に参加することで、会議時間も短くなりました。

さらに幸運だったのが、若手職員の成長とモチベーションにつながったことです。若手職員は、介護技術では先輩職員に及びません。しかし、現場でスマートフォンやシステムを広める過程で、デジタルネイティブである彼らが中心になって教え合い、周りから信頼され、頼りにされました。ICT活用は、顔の見える関係をベースにすると、成果が上がるということがわかりました。

—将来展望をお聞かせください。

特に介護職を目指す学生へ、「ICTを使ってかつこよく仕事ができる」ということを発信したいですね。ICTには、若い人が持つ介護のイメージを変える魅力があると期待しています。

3. システム部門について

裏方として、
さらなる効率化のために
現場のサポート
をしていきたい

生協本部 ITシステム課

柏木 知加子 様



—今回の導入で、具体的には、どのようなことを目指されていたのでしょうか。

これまで、各事業所ごとに請求に特化したシステムを使用していました。請求以外の部分は、各々が独自にExcelや紙で管理していました。今回のICT導入は、法人全体としてのデータ統合と運用の一本化を目指しました。

2. リハビリ部門について

—リハビリ部門について教えてください。

リハビリ部門は、15の事業所に、64名のスタッフが所属しています。

私は、2019年8月に現在の役職についたのですが、特に訪問看護の経営状態が思わしくないという課題がありました。経営的な視点・データを使った視点を取り入れることで、部門として一つの方向を向けるのではないかと考えました。

—データ分析に興味を持ったきっかけを、お聞かせください。

以前、一つの事業所の中で、データ分析を行ったことがきっかけです。職員ごとの稼働状況や移動距離を分析してみると、結構見えてくるものがありました。

介護保険という構造の中で、一定の収益を出して黒字化しなければ、事業の継続も、職員の生活も、守ることはできません。働き方を数値化することがスタートラインであり、それを分析して課題を抽出して、改善策の実施につなげています。

また数値を使って、職員を客観的な視点で労い、評価できるようになりました。

—具体的には、どのような分析を行っていますか。

「スタッフ別稼働額集計表」を、よく使っています。スタッフの「働き」が、一目で理解することができます。

そして事業所ごとに、職員一人あたりの稼働額平均(総稼働収益/実働人員)を算出します。所長・部門統括など、経営層にはデータを公開しています。

事業所のなかでのスタッフの位置、法人の中での自事業所の位置を確認し、部門全体の目標値に届いているかどうかを意識して、業務改善につなげるというのがねらいです。

—導入時、どのような点で苦勞しましたか。

各事業所ごとに、データを保持していたため、データ統合に苦勞しました。データ量は膨大で、重複もかなりありました。また、システムのカスタマイズ・マスタ設定・運用など、サービスごと・事業所ごとの要望を調整するのも、大変でした。

—導入して、どのような成果を感じていますか。

紙の量が減りました。残業も減ってきています。ただ、共有される情報や密度に、事業所間で差があるように感じます。事業所が複数ある法人の強みを生かして、職員同士の教えあいも検討しています。

裏方としてどうすればもっと効率化できるのか、今後も現場のサポートをしていきたいです。

数字で「働き」を
ねぎらいたい

法人リハビリテーション統括

田中 義人 様



—導入して、どのような成果を感じていますか。

「スタッフ別稼働額集計表」のような経営に直結するデータが用意できることこそ、ICTの効果だと感じています。『寿』が入るまでは、手集計で算出していました。

また、月末の報告書作成業務が、ゼロになりました。法人内における紙のやり取りも減り、居宅計画書や他サービスの介護記録・提供票など、データで確認するようになったことも成果と感じています。

—将来展望をお聞かせください。

現場レベルで、更に効率化していくために、『寿』の機能をどのように使うか、法人内でルール化する必要があると感じています。

そのためには、運用の提案含めて、もっと『寿』の情報を発信してほしいですね。



<システムイメージ図>



4. 訪問介護・定期巡回 部門について

—訪問介護・定期巡回部門について、教えてください。

1つの事業所で、訪問介護と定期巡回を運営しています。それぞれ、40名程の職員が所属しており、2つのサービスを兼務しているのが特徴です。

—ICT導入前は、どのような課題に直面していましたか。

ヘルパーは、利用者様宅を訪問する際に、複写する様式の報告書(紙)を利用して、記録を書いていました。記録用紙は、ある程度まとめて事務所に提出してもらい、それを使って、実績を入力していました。月末であったとしても、それがないと実績入力できませんでした。

管理者としては、実際にヘルパーが訪問したかどうか、把握する方法がありませんでした。電話や記録用紙で、訪問状態を確認していました。

—導入時、どのような点で苦労しましたか。

スマートフォンに触るのが初めてという職員が多く、機器の操作説明から始めました。タッチしたのに動かない、反応しない、充電の減りが早いとか。ケアプラスがどうこうというよりも、とにかくスマートフォンに慣れるというのが大変でした。

運用を始めたころは、ヘルパーからの質問が多く、どうなることかと不安もありました。今は比較的慣れてきて、文字入力・音声入力のどちらも使いこなしているようです。

管理者としては
リアルタイムで
訪問状態・実績を
確認できるのがいい

定期巡回・随時対応サービス 北部
ヘルパーステーション 花北
管理者

稲田 由紀 様



—抱えていた課題は、解決しましたか。

入力の遅れや、誤った内容が入力されたりする場合がありますが、大体その都度入力できるようになってきました。管理者としては、リアルタイムで利用者宅に訪問したかどうか、実績と一緒に把握できるのいいですね。将来的には、大変だった月末業務も、楽になると思っています。

また、法人内の居宅と、実績や計画書をやり取りするのも、紙ではなく、データで完結するようになりました。独自様式で運用しているモニタリング報告書なども、文書管理機能を使用して、データで確認できるようにしています。

—将来展望をお聞かせください。

現在は、紙カルテと並行運用をしています。紙カルテには、訪問時の注意点や手順が記載していますが、訪問先で確認できず、同じ手順でケアができていないケースも見受けられます。

サービスの統一性をもっと求めるためにも、ケアプラス上に情報を集約し、訪問前や訪問先で困ったときに、役に立つようにしたいと考えています。ケアプラスでの情報共有は、もっと進めていきたいですね。

ケアプラスを使った
情報共有を
もっと進めていきたい

定期巡回・随時対応サービス 東部、
ヘルパーステーション 別所
サービス提供責任者、オペレーター

渡辺 孝希 様



かんたん・スピーディに

ケアプラス for 『寿』

記録
入力

誰でも簡単に操作できる

リアルタイムに情報共有



【開発元】株式会社 南日本情報処理センター

☎ 099-269-9720

9:00~18:00
(土日祝休み)

✉ medcare@kk-mic.jp

〒 鹿児島県鹿児島市東開町4-104

【販売元】株式会社 システムリサーチ

☎ 079-222-5676

9:00~17:00
(土日祝休み)

🌐 <https://www.sr-co.co.jp/>

〒 兵庫県姫路市北条梅原町271番地 新ヤスナビル4F

WEBサイト

介護 寿 🔍



●本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

●記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。



介護トータルシステム『寿』活用事例

訪問看護記録はその場でパッと入力 隙間時間をフル活用



公益財団法人慈愛会

愛と結の街グループ 介護老人保健施設

笹貫訪問看護ステーション 愛の街

●所在地 鹿児島県鹿児島市小原町 9-1 ●職員数 17 名 ●利用者数 約 270 名

導入のポイント

- ① 隙間時間を活用して訪問記録を入力できるようになった。
- ② バイタル等の記録を訪問先で「ぱっと」入力できる。
- ③ ケアマネ・ヘルパーが登録した支援経過記録を共有できるところが気に入っている。
- ④ 普段からスマートフォンを使っている職員が多いため、操作に慣れるのも早かった。

鹿児島県鹿児島市の笹貫訪問看護ステーション愛の街は、一般科・精神科で経験のある看護師が在籍し、在宅で療養されている方の手助けや医学的なケア・リハビリ・ご家族への介護方法の指導含めて対応しています。また併設のサービス事業所を含む「愛と結の街グループ」として、地域の在宅ケアの中心を担っています。

長年、介護トータルシステム『寿』を介護請求でご利用いただいております。2021 年より、スマートフォンを使った ICT 化に取り組み「ケアプラス」を活用しています。

外出先での記録方法やスマートフォンの活用方法について、管理者の伊地知 (いぢち) 様・管理者補佐の米澤 (よねざわ) 様にお話を伺いました。



一笹貫訪問看護ステーション 愛の街様について教えてください。

愛の街では、一般チームと精神チームにわかれて訪問を行っています。17 名の職員で約 270 名の利用者を担当しています。1 日に 1 人の職員が、約 5 ～ 7 件ほどの訪問を行っています。1 か月の訪問件数は 1000 件を超え、専属の事務員も在籍しています。精神チームの方が、職員・担当利用者様・訪問件数ともに多いです。私たち管理者も管理業務を行いつつ、現場への訪問も行っています。

一これまでの運用に、どのような課題を抱えていましたか？

これまでは、訪問が終わって事務所に帰ってきてから、残って訪問記録を作成していました。訪問の間にわざわざ事務所に戻ったり、お昼休みを使ってとりあえずバイタルの記録だけをしたり…。事務所に帰ってきて記録時間を作らないといけないというのが、ストレスになっていました。

一人一人のカルテは、基本情報から日々の訪問記録まで膨大な量でした。情報の紛失を避けるためにも、訪問前の情報収集は事務所でカルテを見て行っていました。夜間の待機担当は、利用者から連絡が入るとまず事務所に行って、直近の訪問記録を確認してから対応する必要がありました。

そこで 2021 年より、職員に一人 1 台スマホを配布し、外出先でも訪問記録を書けるように「ケアプラス」を導入しました。

ー「ケアプラス」の導入効果を、どんなところに感じますか？

訪問先でのちょっとした隙間時間に訪問記録を入力できるのは、とても助かってます。スマートフォンでケアプラスを見れば、利用者の情報収集も簡単ですね。夜間待機の際も、わざわざ事務所に立ち寄る必要もありません。

精神チームは 2 人 1 組で訪問することが多いのですが、例えば現場で一人が処置中に、もう一人はバイタル等の簡単な記録をその場で「ぱっと」入力してしまっています。

つい先日は、私が運転している間に後部座席で職員が何かしゃべっていると思って振り返ると、なんと訪問記録を音声で入力していました。「そんなに使いこなしているのか」と、驚きましたね。



写真が残せるのも良いですね。傷や皮膚の様子は、やはり文章より目で見たほうがわかりやすく、申し送りや情報共有に使っています。

ー「ケアプラス」の気に入っている機能はどれですか？

法人内の事務員やケアマネ・ヘルパーが登録した支援経過記録を、共有できるところが気に入っていますね。本人やご家族と電話でやり取りした内容や重要な書類のことを記録してくれているので、助かっています。

ー職員様の反応はいかがでしたか？

スマートフォンやケアプラスに慣れるまでは、入力した内容が登録されていなかったり、使い方の質問があったりしましたが、普段からスマートフォンを使っている職員が多かったからか、そんなに大変ではありませんでした。



ー今後の MIC への期待をお聞かせください。

法人内の 3 つの病院、クリニックに通っている患者様の情報は、主治医とも共有できたらいいなと思っています。厳しい・難しい心身状態で、在宅に戻られている患者様もいるので。

先生方も、例えば心不全の患者様で直近の体重コントロール具合を知りたいとか、外来に来る前に訪問時の様子や変わったことが無かったのかを知りたいと言われます。

同じ法人であるからこそ事業所や職種を超えて、情報共有ができればなあと思っています。

●本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

MIC 株式会社南日本情報処理センター

本社 鹿児島市東開町 4-104
東京支社 東京都品川区南大井 6-16-4 戸浪大森ビル 8F
宮崎支社 宮崎市広島 2 丁目 5 番 16 号興亜宮崎ビル 5F
福岡オフィス 福岡市博多区博多駅南 1-9-8 ケイアイビル 5F

●記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

製品情報はこちら (<https://www.kk-mic.jp/kotobuki/index.html>)

TEL 099-269-9720 FAX 099-269-9719
TEL 03-6436-8686 FAX 03-6388-9450
TEL 0985-29-9900 FAX 0985-29-9127
TEL 092-415-1310



導入事例～CASE STUDY～

社会福祉法人 敬愛会

施設名：南台シニアセンター 敬愛の森

●介護保険サービス

- 1階：訪問介護・デイサービス
居宅介護支援事務所
- 2階：グループホーム
[2ユニット 定員18名]
- 3階：看護小規模多機能型居宅介護
[登録25名 通い15名、泊まり5名]
- 4階：ショートステイ
[ユニット型個室 定員20名]



情報共有でご家族様へ安心と信頼を

社会福祉法人敬愛会は、高齢化が進む地域社会において、高齢者が安心して希望をもって生活出来るように南台シニアセンター敬愛の森を創設しました。敬愛の森は、地域の人々にとって「居場所」であり「拠り所」になることを願っています。

情報公開の背景

私たちは、「介護の質の向上のために情報は公開され関係者の間で共有されることが必須条件である。」と考えています。IT環境が進化し、人々の生活ツールとして情報機器が普遍化している現在、ご利用者様、ご家族そして介護者（施設）が介護情報をリアルタイムで共有することができる時代になりました。関係者が情報を共有することにより、ご利用者様の状況変化に対し、それぞれの合意の下に適時的確な対応策が取れることとなります。

質の高い情報が、体系的に記録され、安全に整理保管され、必要な時に必要な情報を取り出せるように管理されていることは、これからの施設運営に無くてはならない環境です。

これらの条件を満たしているのが、トータル介護システム『寿』を基盤とした(株)情報処理システム研究所製「ケア+（ビューリンク）」であると評価し採用しました。



導入事例～CASE STUDY～

医療法人財団 梅田病院

- ・ 訪問看護サービス
→ 訪問看護ステーションちゅーりっぷ
- ・ 通所リハビリ
→ 通所リハビリステーション
- ・ 訪問リハビリ
→ 梅田病院訪問リハビリステーション
- ・ 居宅介護支援サービス
→ 居宅介護支援事業室
- ・ 訪問介護サービス
→ ヘルパーステーションすみれ



地域医療・介護の更なる向上

梅田病院では、昭和9年開設以来、地域医療の中核を担って参りました。リハビリテーション、介護サービスにも積極的に力を入れ一貫した医療介護を目指しております。

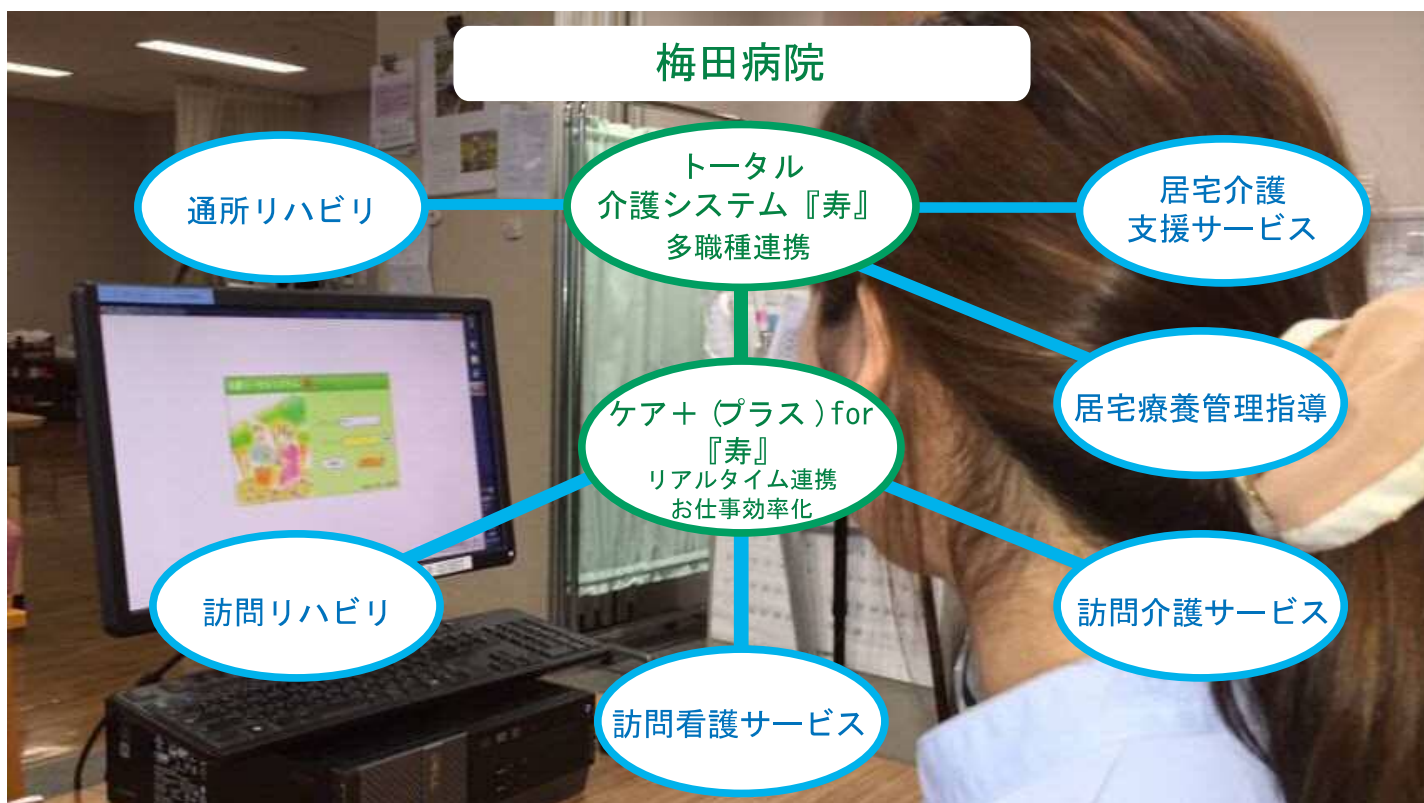
情報公開の導入の背景

● 導入の背景

地域医療・介護の更なる向上の為、リアルタイムな情報連携で多職種間の情報共有の促進を図る必要がある。そこで法人内の他サービス事業所とのリアルタイムな情報連携が可能なトータル介護システム『寿』とケアプラス for 『寿』を採用しました。

● 導入の効果

事務処理の一元化で仕事の効率がUPした。
訪問先で記録が可能になりスタッフの負担軽減につながった。
多職種または法人内他サービス事業所との情報共有が進んだ。



公益社団法人 曾於医師会 介護老人保健施設 ありあけ苑 様



- 所在地
鹿児島県志布志市有明町野井倉8288-1
- 事業所
介護老人保健施設ありあけ苑
曾於医師会立訪問看護ステーション
曾於医師会立居宅介護支援事業所
- 基本理念
地域にある老人保健施設として、在宅復帰支援・在宅介護支援の拠点となり、要介護高齢者及びその家族の生活を支えます。



施設ホームページ (<http://www.minc.ne.jp/ariake-en/>)

“選ばれる”施設を目指して R4システムの活用事例

公益社団法人曾於医師会 介護老人保健施設ありあけ苑様(鹿児島県志布志市)は、志布志・曾於・大崎地域の在宅復帰支援・在宅介護支援の拠点として、介護老人保健施設・通所リハビリ・訪問看護・居宅介護支援事業などの介護サービスの提供を行っています。

今回は、施設一丸となって進めている「新全老健版ケアマネジメント方式R4システム」(以下: R4システム)の導入・定着への取り組みについて、安崎事務長、ケアマネジャー(以下: ケアマネ)の向窪様・木迫様・米永様・河野様にお話をうかがいました。



介護老人保健施設 ありあけ苑
事務長 安崎 義隆 様

■在宅復帰支援・在宅介護支援の拠点として

—ありあけ苑様の地域における役割や目指しているケアを教えてください。

曾於医師会という公益社団法人の施設であるため、営利が目的ではなく、地域の社会福祉の増進に貢献することが役割であると常々思っています。

志布志・曾於・大崎地域というのは、「高齢者が入所して生活できる場所」という観点では、幸いにして比較的恵まれています。そういった地域では、“選ばれなければ”自分たちの施設の力を発揮できません。当施設は、職員が専門性の向上を目指して自己研鑽しようとする姿勢、人とのつながりを重視し家庭的な雰囲気のユニットケアを提供できる点が選ばれる施設となる強みだと考え、ケアの向上に努めています。

■利用者の状態・様子を『想像』できる

—R4システムを導入された経緯をお聞かせください。

平成22年の老健大会に参加した際に、「事業所間・多職種間での均一な情報共有」、「その人らしく生活できるように、できることに焦点をあてる視点(ICFステージング)」というR4システムが掲げる理念・目指すケアに深く共感しました。

当施設では、旧来のアセスメント方式(MDSや包括的自立支援プログラム)と施設サービス計画書を使用していましたが、書類を読むだけでは利用者の状態が想像できないことが多いように感じていました。また、ケアマネがせっかくアセスメントを行ったとしても、なかなか現場のケア担当者の目に触れることは無くプランを作成するためのプロセスの一部としてしか使われていないばかりか、現場の担当者用に「今度このような方をお迎えしますよ」という資料を別途作成していたため、作業の二度手間が発生していました。

実際にR4システムの様式を目にすると、当施設の抱える悩みを解決できるのではないかという思いが強くなり、導入を決意しました。

—実際にR4システムを使用してみて、 抱えていた問題に変化はありましたか？

利用者の”できること”を記入するので、利用者の状況を第三者が見ても理解・想像できるようになりました。今までのアセスメントでは、生活歴や家族への支援の項目などに不十分さを感じていましたが、R4システムでは十分に記載をすることができ、いろいろな家族の形やこれまでのライフスタイルを把握することに役立っています。

矢印や絵を用いているのも、介護はいろいろな人がかわるという視点から考えると、誰でもその人のことをうかがい知れるということにつながっていると思います。家族に対して改善したことが説明しやすいのもいいですね。

「見やすく」、「説明しやすい」形式なので、現場のケア担当者へもA-2、A-3の部分は紙で見てもらうようになりました。栄養士や理学療法士、作業療法士などの専門職の職員には、情報の登録もお願いしています。多職種連携にも本格的に取り組んでいくために、去年から多職種カンファレンス・栄養マネジメント会議に力を入れています。

また、当施設ではA-1の基本情報、A-3のADLの状況を印刷し、紹介・退所のサマリとして活用しています。現場のケア担当用・他事業所用に別途作成していた資料がR4システムの情報から用意ができるようになったので、手間のかかっていた作業が軽減できました。

■ケアマネジメントサイクルに合わせた履歴管理

—『寿』のR4システムに運用を切り替えた中で、使い勝手が変わったところはありましたか？

以前は、配布されていた老健版のシステムを使用していました。記入する内容に大きな違いはありませんが、入力の手間という意味では効率化された部分が大きいです。例えば、A-1からA-4まで作成し、三か月後に評価を行う際、今まではすべての履歴を追加しなければ評価の入力・計画の見直しを行うことはできませんでした。本来なら必要のない履歴が大量に作成されてしまい、履歴管理が大変だったことを覚えています。

『寿』では、A-1、A-2によるインテークのプロセス後は、A-3、A-4のみでケアマネジメントサイクルの履歴を作成可能で、実際の入所生活に沿ったシンプルで使いやすいものとなっています。

また、基本情報・アセスメント(R4)・計画(R4)・ケアの実施情報・請求が一つのシステムの中で完結するため、利用者の情報を二度打ち・三度打ちすることはなくなり、作業の効率化につながりました。



—今後はR4システムをどのように運用していくお考え でしょうか？

2016年4月より、アセスメント・施設サービス計画をすべてR4システムで行うこと、その運用を現場のケア担当者まで広げようとしています。

ケアで忙しい中、現場のケア担当者にどれくらい関わってもらえるか、どれぐらいの記録を入力してもらえるかは、現在も模索中です。中には、パソコンの操作に対して不安を感じたり、『寿』の使い方がわからなかったりする職員もいるので、R4システムへの理解を深める勉強会を操作のレクチャーも兼ねて行う予定です。

システム上での情報共有も目指していますが、まだまだ紙を使う場面も多々あります。『寿』には画面・紙面を問わず文字の見やすさ、配置の調整のしやすさは今後も機能を追求して行ってほしいですね。

●本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

●記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

MIC 株式会社 南日本情報処理センター

製品情報はこちら (<http://www.kk-mic.jp/kotobuki/>)

本社 鹿児島市東開町4-104
東京支社 東京都品川区南大井6-16-4戸浪大森ビル8F
宮崎支社 宮崎市広島2丁目5番16号興亜宮崎ビル5F
福岡オフィス 福岡市博多区博多駅東2-5-19サンライフ大3ビル6F

TEL 099-269-9720 FAX 099-269-9719
TEL 03-6436-8686 FAX 03-6388-9450
TEL 0985-29-9900 FAX 0985-29-9127
TEL 092-260-7793

社会福祉法人 同仁会 特別養護老人ホームさつま園 様



■所在地
鹿児島県薩摩郡さつま町求名13341番地1

■事業所
特別養護老人ホーム さつま園
さつま園デイサービスセンター
さつま園ヘルパーステーション
居宅介護支援事業所さつま園
さつま園在宅介護支援センター

施設ホームページ (<http://satsumaen.jp/>)

『寿』を活用した記録管理で業務改善

社会福祉法人同仁会特別養護老人ホームさつま園様は、「高齢者が自らの意思に基づき自立した質の高い生活を送ることができるように支援します」を基本理念に、昭和58年の開設時より介護サービスの提供や社会福祉法人としての公益活動に力を注いでいらっしゃいます。

今回は、『寿』を用いた記録管理の運用について、導入に至った経緯や導入の効果を中心に、施設長の柿添様にお話を伺いました。



特別養護老人ホーム さつま園
施設長 柿添 信義 様

■地域に『安心』を提供できる施設でありたい

一地域や介護を取り巻く環境に対するお考え、
取り組んでいる活動についてお聞かせください。

さつま町は、人口減少・少子高齢化が進んでいる地域です。次代の担い手となる若者の流出も激しく、介護職離れもあいまって、“人材確保”に非常に頭を悩ませています。

そういった厳しい環境ですが、当施設では「地域への貢献」を施設の理念と方針の一つとして掲げ、地域に根差した様々な活動を行っています。具体的には、交通安全立哨活動に取り組んだり、地域の夏祭りへ参加したりしています。他にも地域サロンでの介護保険に関するご説明や認知症・栄養改善に関する講演、健康体操のレクチャーなどに力を入れています。要支援・要介護認定者を対象としたものだけでなく、地域の方、ご家族のためにもなる内容にしようと取り組んでいます。昨今、介護疲れによる痛ましい事件をよく目にします。サロンでの活動を通して、さつま園がご家族や地域の方に寄り添った、「レスパイト」としての役割も果たせればと考えています。

できるだけ高齢者の方には、住み慣れた地域の中で暮らしていけるように在宅サービスのご支援をしていく、それでも生活するのが難しくなった場合には、さつま園がありますよと、地域に安心を提供できる施設でありたいですね。

一サービス提供にあたって、目指しているケアや重要視している点について教えてください。

利用者様の介護度が年々と重度化していることをふまえると、どうしても事故などのリスクを抱えながらのサービス提供となります。ヒヤリハットを見逃さず、リスクマネジメントに関する職員全体での取り組みが、大きな事故を未然に防ぐことに繋がると考えています。

また、“ふるさと訪問”という活動も行っています。この活動は、利用者様をご自宅へお連れし、ご家族やご友人とふれあい語り合う時間を作ろうというもので、利用者様の「帰りたい」という思いに応え、少しでも楽しい時間を過ごしていただきたくて、毎年企画しています。

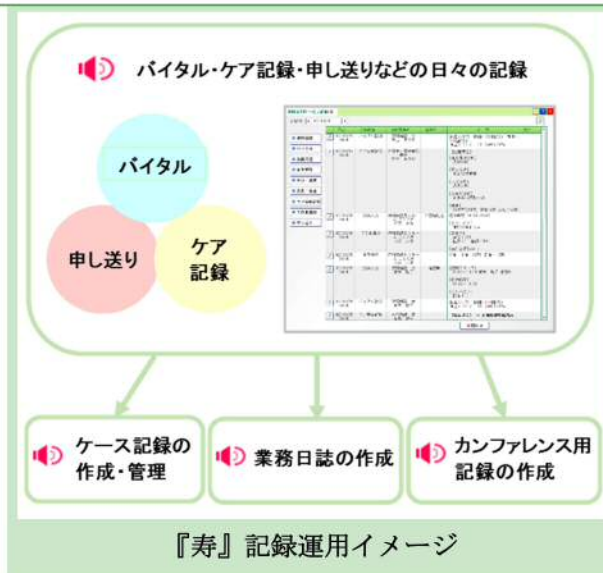
“ふるさと訪問”を実施するうえでも、利用者様が尊厳をもって生活するうえでも、ご家族のご理解・ご協力は不可欠です。当施設では、ホームページにて、利用者様の様子を写真付きで公開しています。当初、経営状況の情報公開が主な目的でしたが、ご家族から「いつも写真の掲載、ありがとうございます」というお声を多くいただくようになりました。知らず知らずのうちにご家族にも浸透していたことが嬉しかったですね。

■様々な場面で『寿』を活用したい

—『寿』を導入されたきっかけをお聞かせください。

もともとは他社の請求システムを使用していたのですが、改正への対応や画面周りの見やすさ・操作のしやすさを考慮して『寿』の導入を決めました。導入してから、『寿』を利用して請求以外の様々な業務も運用できるのではないかと、システムで管理するのもいいかもしれないと思い、MICに相談しながら業務の改善に取り組みました。

現在では、ケース記録やバイタルなどの介護記録の管理、業務日誌等の作成に『寿』を活用しています。なかでも、「ケース記録の作成・管理」は、手書きでしていたころに比べると、ずいぶん楽になりました。



■日々の業務の中に『寿』を組み入れる

—「ケース記録の作成・管理」を含めた記録管理の運用について、教えてください。

現場の担当者は、日々のバイタルやケア記録などを、緊急度の高いものから重点的に記録に残しています。日勤者は夕方に、夜勤者は夜に、うまく時間を見つけて入力しているようです。介護担当者と看護担当者では、職種によって入力すべき内容も異なります。誰がどのような内容を記録するかというのは、記録管理の運用を始めるうえで、職員と共有し指導も行いました。

月末になると、日々入力していた記録を拾い集め、さらにコメントを残してケース記録を作成しています。手書きで作成していたころと比べると、日々の記録を探したり、転記したりという作業が無くなりました。

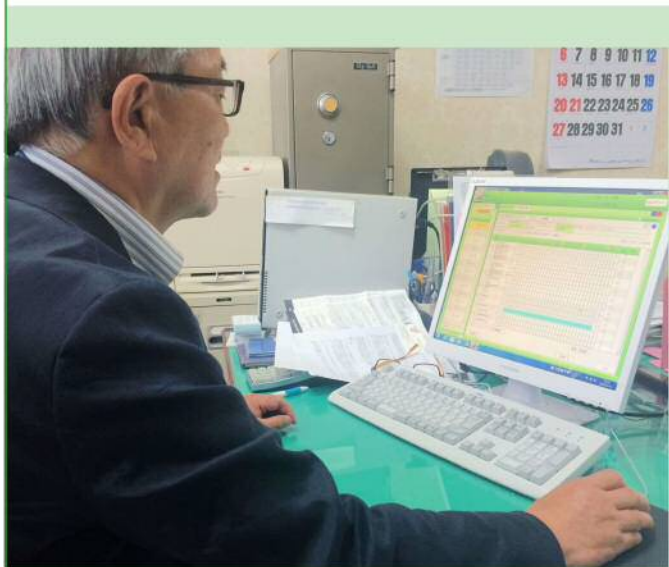
記録の二次利用も簡単にできるようになりました。例えば、カンファレンスを行うにあたって必要な記録、介護用と看護用とそれぞれの職種に応じた業務日誌を作成するにあたって必要な記録など、使用する場面によって、日時や職種、内容などで性質の異なる記録を抽出することが可能です。

業務日誌については、簡単な操作で『寿』上の様々な情報を自動で取得し集約できるので、日々の業務の1つとして組み入れるようになりましたね。

—今後の運用構想や『寿』へ期待していることをお聞かせください。

介護の現場では、多岐にわたった記録を残す必要があります。まんべんなく広く記録を残していこうと考えているのですが、せっかく『寿』にいろいろな機能があるのに、使い方を把握していなかったり、職員が使いこなせていなかったりしています。現場の担当者が利用者の状態を的確に把握して、ケアプランに反映させていく、という理想的なサイクルを目指すためにも、『寿』の使い方を追求していきたいです。

介護業界を取り巻く環境は、年々厳しいものになっています。業務の効率化につながるような機能改善はもちろんのことですが、『寿』を用いた業務の運用提案、介護保険制度などの情報についても、積極的に発信して行ってほしいですね。



●本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

●記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

MIC 株式会社 南日本情報処理センター

製品情報はこちら (<http://www.kk-mic.jp/kotobuki/>)

本 社 鹿児島市東開町4-104
東京支社 東京都品川区南大井6-16-4戸浪大森ビル8F
宮崎支社 宮崎市広島2丁目5番16号興亜宮崎ビル5F
福岡オフィス 福岡市博多区博多駅東2-5-19サンライフ第3ビル6F

TEL 099-269-9720 FAX 099-269-9719
TEL 03-6436-8686 FAX 03-6388-9450
TEL 0985-29-9900 FAX 0985-29-9127
TEL 092-260-7793



介護トータルシステム『寿』活用事例

介護記録業務のICT活用で、業務効率化

医療法人青仁会 介護老人保健施設 ナーシングホーム ひだまり 様



ナーシングホームひだまり様では、在宅復帰を目指した取り組みの一環として、利用者の生活状況が見える丁寧な介護記録を作成し、情報共有を行う習慣が根付いていました。その一方で、職員の負担が大きく、定時をすぎても事務作業が発生するという問題を抱えていました。

今回、ICTを活用した介護記録業務の運用改善により、職員の残業の削減と記録内容の標準化を実現しました。

お客様情報

- ・所在地 鹿児島県鹿屋市下祓川町1853
- ・URL <http://www.ikeda-hp.com/hidamari/>
- ・提供サービス
介護老人保健施設、通所リハビリ、訪問リハビリ
- ・利用中サービス
『寿』ASPサービス
ケアプラス for 『寿』

キーワード

介護記録業務のICT化

残業時間削減

スマホ・タブレット入力

0 分 90 %

介護記録業務をICT化してから、カルテを取りに行く・探す時間

開始3か月以内の介護職の定時退社率

—ナーシングホームひだまり様について、教えてください。

「私たちは笑顔と真心で最良のケアサービスをお届けします」を施設理念に掲げています。病院併設型の老健として、利用者様のニーズに合わせたリハビリテーションの提供と、在宅生活への支援を心がけています。

在宅復帰への支援を意識し、利用者の生活像が浮かぶような介護記録を、手書きのころから丁寧に残す習慣が根付いていました。様式は、他施設への見学や学会での情報収集を通して、改良を重ねたわかりやすいものでした。



事務長

重吉 邦寿 様

—介護記録業務のICT化を行ったきっかけを教えてください。

職員の仕事が定時に終わらず、30分～1時間程超過するという問題がありました。必ずしも、記録を書くことだけが原因ではありませんが、本来のケア業務・休憩時間を圧迫し、職員の負担になっていることがわかりました。また、せっかく書いた記録の内容も、職員のスキルによっては、日記調になってしまい、介護記録として十分ではないものも見受けられました。

他の職種では、カルテを現場で探す手間や、紙を使った情報共有に限界を感じていたようです。これを機に、施設全体で、介護記録業務のICT化を進めることにしました。

抱えていた問題

①30～1時間/日の残業

②記録スキルのばらつき

③カルテを見に行く・探す手間

—具体的に、現場ではどのような運用を行っていますか。

介護職は、現場に入る際に、一人一台のスマートフォンを常備し、バイタル・食事・水分・排泄等、ケアの実施状況に応じて、その場でタイムリーに入力を行っています。これまで、記録として残していた内容を標準化し、チェック形式にすることで、記録に要する時間が短縮され、記録内容の統一化・簡素化・効率化に繋がっています。

ケアプラスの入力には、難しい操作はありません。どこに何を入力するのか、直感的でわかりやすく、職員の心理的な抵抗も少なかったように思います。実際に運用を始めてみると、追加する項目・必要のない項目・まとめて良い項目ができました。運用にあわせて、項目の内容をカスタマイズできるという設定の柔軟さも、助かっています。



介護主任/リスクマネージャー

山元 武 様

—運用を始めるにあたり、不安はありませんでしたか。

運用初日は、日付が変わる夜勤帯からの開始ということで、現場が混乱するのではと懸念していましたが、思ったほど混乱することはありませんでした。

システムの導入に伴い、事前の操作研修を開催したり、デモ機を手配して全職員がシステムを見て・触れて・体験する期間を設けたりしました。そうすることで、ケアプラスを意識的に操作し、どこに何を入力するかなど運用方法についての理解を深めることができました。

—導入をして、抱えていた問題に変化はありましたか。

記録業務にかかる時間を減らせたことで、手厚くケア業務に介入できるようになりました。また、休憩時間の確保・残業時間の短縮も実現しました。いつでもどこでもリアルタイムで、必要な記録を確認・共有でき、多職種間での連携強化にも効果を感じています。

施設全体としてみても、システムを導入したことが、情報共有体制の確立、業務の効率化、職員の負担軽減につながったと考えます。



—今後の展望をお聞かせください。

介護記録業務のICTに伴い、効率的で統一した記録を残せるようになりました。一方で、入力項目を標準化する過程で、記録内容が画一的になり、具体的な細かい記録・情報をどのように残していくかといった課題も見えてきました。

各職種間で残すべき記録、ご家族や他施設への情報提供において必要な記録とは何か、施設全体で継続的に議論することが、更なる質の向上につながると考えています。利用者様の生活像が見える情報共有と、職員の負担軽減のための記録方法が実現できるよう、一日も早く定着させていきたいです。

タブレット操作に不安がある方々におすすめ！

かんたん・スピーディに

記録
入力

ケアプラス for 『寿』

モバイル入力を考えた画面設計で
誰でも簡単に操作できる

リアルタイムに情報共有



MIC 株式会社 南日本情報処理センター

☎ 099-269-9720 9:00~18:00
(土日祝休み)

✉ medcare@kk-mic.jp

本社
東京支社
宮崎支社
福岡オフィス

鹿児島市東開町4-104
東京都品川区南大井6丁目16番4号戸浪大森ビル8F
宮崎市広島2丁目5番16号興亜宮崎ビル5F
福岡市博多区博多駅東2-5-19サンライフ第3ビル6F

WEBサイトはこちら

介護 寿 🔍





介護トータルシステム『寿』活用事例

7 割の職員が
「紙カルテより使いやすい!」



医療法人 健誠会



介護老人保健施設

アンダンテ伊集院

●所在地 鹿児島県日置市伊集院町妙円寺 3-1303-10 ●職員数 約 70 名 ●病床数 70 床

導入のポイント

- ①『寿』でカルテをいつでも・どこでも見る・書く・探すことができるようになった。
- ②科学的介護情報システム (LIFE) のデータ提出もスムーズに準備が出来た。
- ③苦手意識のある職員には、部署の「IT 担当」が相談役として不安を汲み取っていた。
- ④自施設の運用を『寿』に落とし込む運用検討を行うことで様々な業務を効率化できた。

鹿児島県日置市の介護老人保健施設 アンダンテ伊集院は、看護・介護・リハビリテーションのサービスを通して、「寝たきり防止・運動機能の回復及び自立・生活の質の向上支援」に力を入れています。「在宅復帰を目指す」という老健本来の役割を果たそうと、令和元年 6 月より超強化型を算定しています。

長年、介護トータルシステム『寿』を介護請求でご利用いただいております。平成 28 年 4 月より、本格的に『寿』を使った介護記録の ICT 化に取り組んでいらっしゃいます。

『寿』を使った実際の運用・ICT 化成功の秘訣等について、事務長の丸山 (まるやま) 様にお話を伺いました。



一 『寿』で介護記録の ICT 化に取り組んだきっかけを教えてください。

これまでは紙カルテで運用していましたが、

- 知りたい情報はカルテを保管している部署に見に行かないとわからない
- カルテを見ても綴り順がバラバラで探すのが大変
- 手書きが読みづらい
- 原本の保管・破棄業務が面倒

といった様々な問題を抱えていました。

カルテを見たい・記録を書きたいと思っても、他の職員と時間帯が重なり待ち時間が発生していました。思ったときに・いつでも・どこでも情報を見る・書ける・探せる必要がありました。

一 『寿』の導入効果を、どんなところに感じますか？

「紙カルテを見に行かなくても、『寿』を見れば情報が揃っていて探しやすい」というのが一番のメリットです。導入して 8 か月後に、職員向けのアンケートでも 7 割以上の職員が『寿』の方が紙カルテより使いやすいと回答してくれました。

また、外国籍の職員も 4 名おります。なかなか文章で記録を作成するのは難しいですが、数字や選択式の記録は入力してくれています。

LIFE のデータ提出も、スムーズに準備が出来ましたよ。利用者に関する全ての情報を『寿』に集約して、職員がパソコンの入力に慣れていたのが良かったですね。各部署で入力したデータを事務部でチェックして提出していますが、開始 2 か月後ぐらいからデータの修正もほとんどなくなりました。

一成功の秘訣は何でしょうか？

3 つあると思います。

- 導入前に、導入のメリット・デメリットを職員へ具体的に説明した。
- 各部署に 1 人ずつ「IT 担当」を任命した。
- 各部署ごとに現場でヒアリング・説明会を実施して、『寿』の機能を運用に落とし込んだ。

介護記録を ICT 化すれば、何でも実現できるわけではありません。ただ、今悩んでいる問題が解決できるという現実的なメリットを職員には伝えていました。幸いにも職員が前向きに取り組んでくれたのも大きかったです。どうしても抵抗感や苦手意識がある職員は、系列病院での電子カルテ導入の成功事例を共有して励ましたり、代行入力を行ったりしています。

説明会で「何でも質問してくださいね」と現場に伝えても、その場では質問が出ずに、何を聞けばいいかわからないというような反応がありました。各部署の IT 担当が普段の相談役として、個人の不安や要望を上手に汲み取って私に伝えてくれたのも助かりましたね。

一具体的にはどのような記録を『寿』で行っていますか？

バイタル・ケア実施記録・食事 / 水分量・排泄・申し送り・掲示板・文書管理・業務日誌・アクシデントレポート等々ほとんどの機能をフル活用しています。職員は出勤時に必ず『寿』にログインするので、利用者の申し送りや施設内での伝達事項の伝え漏れがありません。「どうやって『寿』で情報共有するか？」ということを考えて活用しています。

オンライン面会・窓越し面会の予約管理にも、『寿』の行事予定機能を使っています。事務部で電話を受けて行事予定に登録しておけば、時間帯の重複を防ぎ、いつ・家族の誰が面会するのかを現場と共有できて便利です。



もっと詳しい運用方法は Web に公開！



一運用で工夫した点を教えてください。

入力しやすい環境を整える工夫をしました。始めたころは、パソコンが各部署の詰所に 1-2 台ずつありました。現在は台数を増やして、各部署に 3-4 台ずつ・計 40 台程あります。カート用のノートパソコンも 3 台用意しています。看護師はラウンド時にカートを持って行き、ベッドサイドでもパソコンを使っていますよ。

各部署が入力しやすいように、よく使うケア実施項目は選択肢にしました。自分の職種が使う選択肢だけを画面に表示させているので、選びやすいと聞いています。



一これから介護記録の ICT 化に取り組む法人様へアドバイスはありますか？

自施設の運用や様式にシステムを 100% 合わせると、必ず無理が出てきます。『寿』の機能を知ってどういったら使いこなせるかという視点で、運用検討をするとうまく行くと思います。

●本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

●記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

MIC 株式会社南日本情報処理センター

製品情報はこちら (<https://www.kk-mic.jp/kotobuki/index.html>)

本社 鹿児島市東開町 4-104
東京支社 東京都品川区南大井 6-16-4 戸浪大森ビル 8F
宮崎支社 宮崎市広島 2 丁目 5 番 16 号興亜宮崎ビル 5F
福岡オフィス 福岡市博多区博多駅南 1-9-8 ケイアイビル 5F

TEL 099-269-9720 FAX 099-269-9719
TEL 03-6436-8686 FAX 03-6388-9450
TEL 0985-29-9900 FAX 0985-29-9127
TEL 092-415-1310





介護トータルシステム『寿』活用事例

『寿』で介護記録を ICT 化 LIFE 運用もスムーズに



公益財団法人慈愛会

愛と結の街グループ 介護老人保健施設

愛と結の街

●所在地 鹿児島県鹿児島市小原町 8-3 ●病床数 100 床（一般療養 50 床、認知症専門 50 床、ショートステイ 空床利用）

●グループ事業所 居宅 1、訪問 1、訪問 1、GH1、デイサービス 2、デイケア 1

導入のポイント

- ① これまでは『寿』を介護請求にのみ利用していた。
- ② LIFE に向けて、全ての介護記録を『寿』に集約するようにした。
- ③ 運用検討は「IT 委員会」の会議で協議し、法人内で勉強会を開催した。
- ④ 『寿』が無ければ、LIFE 運用は回らなかった。

鹿児島県鹿児島市の介護老人保健施設愛と結の街は、一般療養と認知症専門病床を持ち、ご利用者様の状態に応じて日常生活への復帰を促す取り組みに力を入れています。

また併設のサービス事業所を含む「愛と結の街グループ」として、地域の在宅ケアの中心を担っています。

2021 年 1 月より全面的に介護記録の ICT 化に取り組み、『寿』を記録運用でも活用いただいております。

介護記録の ICT 化・科学的介護情報システム（以下 LIFE）のデータ提出について、導入の背景や活用方法を、課長代理の岡村（おかむら）様、事務部主任の本田（ほんだ）様にお話を伺いました。



一 『寿』で記録の ICT 化に取り組んだきっかけを教えてください。

元々「IT を使った先進的な取り組みで生産性やサービスの質を向上しよう」という目的で、「IT 委員会」という委員会を立ち上げていました。

これはもう全ての記録を ICT 化して『寿』に集約しなければいけないと本格的な検討に至ったのは、やはり「LIFE」の影響です。

LIFE のフィードバックデータを元にした組織改善や、データ提出による加算取得を目指していました。当初、どのようなデータを提出するかわからなかったこともあり、ひとまず全てのデータを『寿』に集約して、いつからでも提出ができるようにと準備を始めました。

一運用を始めるにあたって、スケジュールや検討内容を教えてください。

2021 年 4 月から LIFE が始まることは、早い段階からわかっていました。
まずは 2020 年 12 月までに、各部署にある利用者様の情報を『寿』に集約することを目標にしました。データ提出まで 3 か月程余裕があれば、運用の見直しやデータの点検もできると考えたからです。

運用検討は「IT 委員会」で行いました。委員会のメンバーは各部署の責任者のため、スムーズに検討が行えました。現在は不定期で開催していますが、一番多いときは月 2 回程度会議を開催していました。細かな確認や依頼事項はチャットツールを使って調整していたので、会議の回数は少なくて済みました。



一職員様の教育・フォローはどのように行われたのですか？

「記録は紙でするもの」という習慣を変えられるか？という部分に、現場の責任者は不安を覚えたようでした。そこで、先行して『寿』で記録を ICT 化していたデイサービスの管理者に依頼して、操作研修を行うことにしました。操作研修にあたっては、下記のような内容をレクチャーしてもらいました。

- 紙の記録を『寿』のどこに入力しているのか？
- もっと簡単に入力するための方法
- コピー＆ペーストなどの覚えておきたいパソコンの便利な操作

自由参加という形でしたが、3～4 回実施をすると、ほとんどの部署の主任・副主任クラスが出席してくれました。主任・副主任クラスが、自主的に各部署での運用を考えてくれたのもありがたかったです。

法人内に複数のサービス事業所があるからこそ、先進的な取り組みをしている事業所をお手本にして。事例を共有・教えあいができたというのは、大きかったと思います。

一具体的にはどのような記録を『寿』で行っていますか？

介護保険請求に必要な利用者の基本情報は、元々『寿』に登録していました。
今は、バイタル・ケア実施記録・食事 / 水分量・排泄・申し送り等の機能を使っています。
業務日誌や文書管理は、一部紙で運用しています。今後『寿』を活用していきたい部分ですね。

一『寿』で LIFE のデータ提出をするメリットを教えてください。

介護ソフトが LIFE に対応していなくても、厚労省のサイトからデータ入力是可以来ます。ただ、各部署でそれぞれ入力してもらっているように、LIFE で提出するデータは多岐にわたります。その様々なデータを、取り纏めてサイト上で手入力するのは現実的ではありません。

『寿』が無かったら、LIFE 運用は回りませんでした。

また LIFE 以外の部分でも、記録を ICT 化するメリットを徐々に感じています。1 か所で入力した情報を、部署や職種に関係なく共有できたり、いつでも検索できるというのはいいですね。

もっと活用ができれば、利用者情報の共有や各部署の運用の標準化にもつながるのではないかと期待しています。

一これから介護記録の ICT 化や、LIFE のデータ提出をされる法人様へアドバイスはありますか？

介護記録の ICT 化も、LIFE のデータ提出も、始めるのであれば早いうちに取り組んだ方が良く考えます。LIFE だけではなく、トータルの業務効率化を念頭に置いて、組織や業務の将来図を描けると取り組みやすくなるのかもしれない。

他施設での運用や先進的な取り組みを知るために、情報交換のネットワークや勉強会があると、もっと活用が進むのかなと思いました。



● 本文に記載されている内容は予告なく変更することがあります。

● 記載されている会社名・商品名は、それぞれ各社の商標または登録商標です。

MIC 株式会社南日本情報処理センター

本社 鹿児島市東開町 4-104
東京支社 東京都品川区南大井 6-16-4 戸浪大森ビル 8F
宮崎支社 宮崎市広島 2 丁目 5 番 16 号興亜宮崎ビル 5F
福岡オフィス 福岡市博多区博多駅南 1-9-8 ケイアイビル 5F

製品情報はここら (<https://www.kk-mic.jp/kotobuki/index.html>)

TEL 099-269-9720 FAX 099-269-9719
TEL 03-6436-8686 FAX 03-6388-9450
TEL 0985-29-9900 FAX 0985-29-9127
TEL 092-415-1310

